論説

明治二十年代の平和思想

——北村透谷と内村鑑三の場合——

田畑　忍

一　始めに

かつて日本は尚武の国であり、その国民は戦争愛好の国民である、と言われていた。しかし、往時の尚武・好戦者は主として戦争を職業とする武士階級であった。そうして国民の大部分たる農民は、むしろ平和愛好者であった。徳川時代において、この農民の平和感情を如実に反映した一人の儒者は、医者でもあった安藤昌益(註一)である。すなわち昌益は、わが封建の時代に非武装と兵学排除と戦争否定の思想を極めて明瞭な形で展開した。それはカントの平和思想に先行して、カントよりも徹底した、しかし体系的ではない平和非戦の論であった。それを継承する思想家なき状態で、幕末になって、「大義を四海に布かんのみ」と唱えた横井小楠の平和の論が現われた(註二)。小楠は、武士階級出身の朱子学者（のちに陽明学者）で、日本独立の必要的条件と言う見地から、孔孟の教えと西洋文明に対する信頼の念に基いて、武装的戦争廃止論を唱導したのである。また幕末の洋学者で最初のオランダ留学より帰朝した西周(註三)は、すでに早く永久平和論のカントを紹介したのである。

明治初期の十年と、次ぎの十年代には、しかし平和思想を唱えた者も、社会主義思想を述べ伝えた者も私は見出す

ことができない。徴兵制度を布いたばかりの明治初年は、そのような近代的日本造成の「文明開化」の時代であった。そこに行われた思想は、天賦人権論（のちに自由民権論）と文明論と国家独立論と種々のナショナリズムにすぎない。加藤弘之・福沢諭吉・福知桜痴・植木枝盛・大井憲太郎・陸実・徳富猪一郎・杉浦重剛等々が、その代表的なイデオローグであった。しかしその頃国民の中には一般に徴兵忌避の感情が存在したのであるが、二十年代になってこれらの感情及び思想とともに、戦争主義と戦争意識の抬頭を背景に、平和思想を唱えるものが現れるにいたった。彼等の中でとくに輝やいているものは北村透谷・木下尚江・内村鑑三等である。しかし彼等は安藤昌益にも横井小楠にも、そうしてまたカントの平和思想等にもつながるものではない。すなわち彼等の平和思想はキリスト教の信仰に由来する平和主義にほかならないからである。もちろん当時のキリスト者が、すべて平和主義者であったのでないことは、今日と異るところがない。

のみならず、のちに平和主義と非戦の思想に徹底した内村鑑三も、二十年代の初めに平和思想を有するものではなかった。武士の家に生れた彼は、キリスト教徒になってからもなお戦争への愛着心をもっていた。のみならず内村はクロムウェル伝を読んでクロムウェルを尊敬していたので、不義の戦争のほかに正義の戦争があると考えていた。それ故クエカー教徒の平和主義に組することができなかった。すなわち内村は、明治二十一年に帰国して二十三年一高の講師就任匆々に不敬事件を起して以来、甚はだしき迫害に逢って、妻の病死と自らの疾病の経験をした後、北海道・北越・関西・九州等に流浪の旅をつづけつつ其の初期の諸著作(註四)をなしたが、しかも当時すでに早く米国フレンド派の平和の会が日本につくられていた環境にあってなお平和思想を抱くものではなかった。否、彼のそれらの初期の諸著作の中に日清戦争に積極的に協力した文献が見出されるのである。わけても『日清戦争の義』(Justification of the

Corean War）は、その最も代表的なものであった。しかし北村透谷等は最初からの平和主義思想家として特筆に値する人たちである。一般に知られてはいないが、キリスト者ではなくむしろ日本主義の歌人として知られる正岡子規もその青少年の時代に於て生来的の平和主義者であった。(註五)

（註一）安藤昌益『自然真営道』参照。なお田畑忍『戦争と平和の政治学』・憲法研究所『平和思想史』中の井ケ田良治『安藤昌益の平和思想』等参照。

（註二）田畑忍前掲著書参照。

（註三）森鷗外『西周伝』（津田真道序文）・麻生義輝『近世日本哲学史』・カント『永久平和の為に』参照。なお、朝永三十郎『カントの恒久平和論』・憲法研究所『平和思想史』中の八木鉄男『カントの永久平和論』及び前掲拙著等参照。

（註四）この時代に、内村鑑三は『地人論』（明治二十七年）・『Japan and Japanese』（明治二十七年）・『余は如何にしてキリスト教徒となりし乎』『How I became a christian』（明治二十六年稿二十八年刊）・『基督教徒の慰め』『求安録』（明治二十六年）などを書いてをり、これらのものに引きつづいて『興国史談』（明治三十三年）などの諸著作がつづいているのであるが、『日清戦争の義』は、日清戦争が義戦であることを、日本のためにとくに英文で執筆して世界に弁明したものである。詳しくは後述。

（註五）子規記念堂（松山市にある子規の生家）に保存されているその青少年時代に書いたものの中に私は徹底した平和論を見出して目を見張ったことがある。

二　キリスト教平和思想の先駆者・北村透谷

㈠　日本におけるフレンド派の平和運動は、些やかなるものではあったが、二十年代を飾るものであった。すなわち北村透谷(註一)を中心（印刷人）として、加藤万治・久野余熙などが加わって、その雑誌「平和」の発刊が明治二十五年三月に始められたのであるが、彼等の「平和会議」は二十三年に発足していた。またフレンド派の宣教師コーサンド

及びブレスウェートは、すでに十八年及び十九年に相次いで日本に来住していたので、フレンド派の平和運動は、キリスト教の伝道とともにおそらくはその当初から行われていたのであろう、と考えられる。しかし「平和」及び「平和会議」の活動は、平和思想の宣伝活動としては影響的ではなく、耳を傾ける者も従ってすくなく、またその主張も整ったものではなかった。否、むしろ不十分なるものであったと言わねばならない。

透谷の「平和」に執筆しているものの多くはペンネームによるもので、その多くが人生論であり恋愛論であって、平和論は数から言って多くはない。(註二) また「平和」には久野宗熙・河路寛堂・戸川残花・山口三之助等の平和論がある。すなわちこれらの人々が、透谷とともに平和の勝利と廃戦を主張していたのである。二十年代は、かくしてキリスト教的平和思想草創の時代であったと言うことができよう。例えば「平和」第五号に「平和会記事」として、「去る七月八日在東京の平和会会員は芝浜海水亭に於て小集会を催うし懇談をせり。集るもの三十名、皆平和主義を貫徹せんとする篤志の人々なり。書記加藤萬治氏先づ開会の主意を述べ、平和会の日本に起りてよりの歴史を物語られ、他の委員諸氏之に次いで所見を陳じ「河路、水野、山田、林、北村等の諸氏各々意見を吐きたり。会の開かれしは二時にて終りしは五時過なり」とあるとおり、その些やかなる会であったことが想像される。また「平和」第三号は、当時バプテスト青年会発兌の同名の雑誌「平和」について、「批評」と題して、「吾人は奇しくも吾人と同時に同名の兄弟を得たるをよろこぶ事限りなし福音新報にて言へる如く吾は国家主義の平和を談じ卿は個人主義の平和を説くこの点に於て少しく相差へど要するに本然の基督の教旨に基きて平和の王国を我邦にもちきたらせんとの主意に於ては異なるところあらずと信ずるなり」、という記事を掲載している。

(二)　ところで、雑誌「平和」の主柱であった透谷の執筆にかかる「平和」発行之辞の中には、次ぎの如き文章が

書かれている。曰く「……平和の文字甚だ新なり、基督教以外に対しては更に斬新なり。加ふるに世の視聴を聳かすに便ならぬ道徳上の問題なり。然れども凡そ宗教の世にあらん限り、人の正心（コンシエンス）の世界を離れぬ限り、吾人は「平和」なる者の必須にして遠大なる問題なるを信ず。吾人は苟くも基督の立教の下にあって四海皆兄弟の真理を奉じ、斯の大理を破り邦々相傷うを以て、人類の恥辱之より甚しきはなしと信ず。吾人は言う、基督の立教の下にありと。然れども吾人、豈偏狭自ら甘んぜんや、凡そ道義を唱へ、正心を尊ぶもの、釈にも儒にもあれ、吾人焉んぞ喜んで袂を連ねざらんや。吾人は政論家として若くは経世家として、是問題を唱道する者にあらず、尤も濃厚なる、尤も着実なる宗旨家として、善く世の道理力と人の正心とを相手として、以て吾人の天職を尽さんとするにあり。抑々、平和は吾人最後の理想なり。……人と人との間、邦と邦との間に猜疑騙瞞若し今日の如くにして終るとせば、宗教の目的何所にかあらむ。強は弱の肉を啖ひ、弱は遂に滅びざるを得ざるの理、転々して長く人間界を制せば、人間の霊長たるところ何所にか求めむ。基督、仏陀、孔聖、誰れか人類の相闘ひ、相傷ふを禁ぜざる者あらむ。且つ夫れ兇器の横威、人倫を泯し、天地を冥うする久し。特に欧洲に於て然りとなす。甘妙なる宗教の光明も、暗憺たる黒雲に蔽はれて、天魔幕上に哄笑するかとぞ思はる。今や往年の拿翁なしと雖、武器の進歩日々に新にして、他の拿翁指呼の中に作り得べし、以て全欧を猛炎に委する事、易々たり。是よりの戦争は人種の戦争尤も多かるべく、塵戦又た塵戦、都市を荒野に変ずるまでは止まじと某政治家は言へり。吾人の平和の君を世に紹介する豈偶然ならんや。今や、「平和」なる一孩子、世に出づ。……大喝迷霧を排ふは吾人の願ふ所にあらず、一点の導火となりて世の識者を動かさん事こそ、吾人が切に自ら任むところなれ。更に言う、吾人は宗教と併行し、道心と相聯り、以て吾人の希望を達せんと期す。戦争は政治家の罪にあらずして、人類の正心の曇れるに因ってなることを記憶せられよ。幸に江湖の識者来って、吾

人に教へよ、吾人をして通津を言ふの人たらしむる勿れ。吾人は漁郎を求めつつあり、吾をして空言の徒とならしむる勿れ。天下誰れか隣人を愛するを願はざる者あらむ」。

「平和」と「平和会」の運動が、キリスト教主義的な精神上の平和主義以上に出でざるものであり、更にまた大衆的な政治的影響を企図せしものでなかったことは、以上の引用によっても明らかである。

㈢　透谷の平和論は、右の文章のほかに、『想断々』（「平和」一号所載・無署名）、『最後の勝利者は誰ぞ』・『トルストイ伯』（何れも「平和」二号・無署名）、『一種の攘夷思想』（「平和」三号・無署名）、『海軍の拡張』（「平和」十一号・無署名）、『復讐・戦争・自殺』（「平和」十二号・無署名）等々によっても、これを窺えるのであるが、例えば『想断々』では米国を平和の国と見て「戦争の精神・年を逐ふて減じ行き、いつかは戦争なき時代を見るを得んか」と言い、また『平和の君の王国』では「光りある国をば黒煙の中に巻き去り、家を燬き、肉を燻し、砲銃は大気を震動し、山野を荒蕪にし、「死神」をして大地に蔓延せしむる戦争たる者の、基督の教旨に背戻する事、豈甚しからずや」と述べている。『海軍の拡張』では、海軍の拡張を揶揄し、『復讐・戦争・自殺』では個人間の復讐に国民間の戦争を類へ、「復讐の時代は漸く過ぎて、而して戦争も亦た漸く少なからんとす。宗教の希望は一個人の復讐を絶つと共に、国民間の戦争を断たんとするべし」と説いている。また『トルストイ伯』は、『コサック』『イバン・ゼ・フール』等に示されているトルストイの平和思想に共鳴してこれを紹介している文章であるが、おそらくトルストイの平和思想の最初の紹介者は透谷であったということができよう。なお彼は、トルストイの『戦争と平和』の翻訳を企てたが、それは果されずに終っている。また透谷は、『聖書平和之教』を書いており、『懸賞問題答案平和雑誌』『ウィリヤム・ジョンス氏演説筆記』『平和会の起源及発達』などの翻訳をのこしている。

透谷の平和論は、とにかく、フレンド派のキリスト教主義に基くものであって、決してそれ以外のものではない。情感的であって理論的ではない。また体系に欠くるところがあり、かつその自殺による早逝のために発展を見ることなくして終っている。もちろん彼の同志たちの平和主義の思想と運動は細々としてつづいていったのである。しかしすでにその頃以前より抬頭していた好戦、とくに清国に対する敵愾的国民感情の風潮と思想にそれは圧倒されてしまった感がある。当時のキリスト教主義の諸雑誌（例えば「国民の友」「六合雑誌」「女学雑誌」「福音新報」「聖書の友雑誌」「同志社文学」等々）に平和論のなかったことも、そのような時代的傾向と無関係ではなかったと言えよう。それにもかかわらず、透谷の平和論は純粋無垢で、それには何らの迷いも見られないのである。

(四) 木下尚江が透谷や加藤萬治等のクエーカー的平和主義を継承して、このような軍国主義的風潮と政治的情勢に抗して、そのキリスト教的信仰の中に烈々たる平和思想を発表するようになったのはすこしくのちのこと（同じく二十年代）である。しかも尚江が徹底して平和思想を、その小説『火の柱』『良人の自白』、その他の文章で展開するようになったのは、三十年代になってからである。(註四)

また征清合理論を説いていた徳富猪一郎が、日清戦争後に外遊してトルストイを訪問し（二十九年）、その平和思想に接して驚嘆した文章を書き、(註五) これに刺激された徳富芦花がトルストイに共鳴するようになって、その平和思想の成熟するにいたったのも三十年代になってからである。(註六) 同志社から早稲田に行った安部磯雄また然りである。(註七) 「上毛教会月報」（三十一年以降）で筆陣を張った牧師・柏木義円もまた然りである。

堺枯川・幸徳秋水等々の社会主義的平和思想の開花したのは、もちろん三十年代になってからである。(註八) 与謝野晶子が「君死に給うことなかれ」という反戦歌を書いたのも日露戦争（三十七・八年）の最中であった。(註九) 一言にして言う

ならば、日清戦争の勝利によって昂められた軍国主義的国論と日露戦争（三十七・八年）への急なりし風雲とが、逆にこれらの平和思想を呼んだのである、と形容することができよう。しかしこの時代（三十年代）においても政治家の中にこれを反映するもののなかったことは注目すべきことと言わねばならない。しかるに透谷は、日清戦争以前において、その天才的な文学者的直感によって、フレンド派のキリスト教主義的平和思想にとらえられていたのである。かくして透谷が、日本におけるキリスト教主義的平和思想の、従ってまた日本における平和思想一般の著名な先駆者となったことは明瞭である、と言わねばならない。

（註一）北村透谷（一八六八年（明治元年）―一九〇三年（明治二十七年））、本名は北村門太郎。のちに早稲田大学となった東京専門学校の出身。若くして政治に関心を示したが、二十一才のとき石坂美那子と結婚。翌年『楚囚の詩』を出版し、爾来文学的活動に従事した。また明治女学校教師となり、「文学界」と「評論」をも創刊。神経衰弱の結果二十七才の時に自殺した。『透谷全集』三巻にその作品が収録されている。

（註二）北村透谷が「平和」の中心であったことについて、例えば「国民新聞」は次ぎのような批評をしている。曰く「『吾人は苟も基督の立教の下に在て四海皆兄弟の真理を奉じ斯の大理を破り人々相傷ふを以て人間の恥辱之より甚しきはなしと存ずと』是れ雑誌『平和』の発行せらるる所以なりと知らる新詩人の一人として知られたる透谷北村門太郎氏の首として執筆するものにて清烈なる思想典雅なる文字一の好雑誌なり定価一部金三銭」。

（註三）『透谷全集』解題（勝本清一郎）参照。

（註四）小桂圭司『木下尚江』及び憲法研究所『平和思想史』中の平林一『平和主義に於ける木下尚江と北村透谷』等参照。

（註五）徳富猪一郎『蘇峯自伝』『蘇峯文選』中の『トルストイ翁を訪ふ』等参照。すなわち蘇峯は、『トルストイ翁を訪ふ』の一文中で次ぎの如くに述べている。曰く「翁は基督教と愛国心の両立す可らざるを説きぬ。翁は日本が何故に、後れ馳せに、欧羅巴の真似をなし、武を黷し、兵を増すかを嘆じぬ。翁は徴兵の不正不理なるを説きぬ。……翁又た曰く、若し余に向て露人なりと問はゝ、余は否と答へん、余は世界の市民なり。将た独逸なり、日本なり、来りて露国を侵略するも、余に於て痛痒相関せず、余は露国の強大なるよりも、寧ろ弱小を望むと」。蘇峯はもちろん意見を異にすることをトルストイに告げたと述べてをり、また横井小楠の思想と詩について語って、トルストイが小楠に共鳴したこと

などについて書いている。

（註六）　徳富芦花『富士』・前田河広一郎『芦花伝』等参照。

（註七）　田畑忍『憲法改正論』中の『安部磯雄の無抵抗主義平和思想』・憲法研究所『平和思想史』中の片山哲『安部磯雄の平和思想』及び同『安部磯雄伝』等、同じく憲法研究所『抵抗権』中の笠原芳光『非戦平和論を貫いた牧師柏木義円』『柏木義円――非戦平和のキリスト者――』等参照。

（註八）　憲法研究所『平和思想史』中の鈴木茂三郎『堺利彦・片山潜・山川均の平和思想』及び辻野功『幸徳秋水の反戦思想』等参照。

（註九）　憲法研究所『平和思想史』中の江間章子『与謝野晶子の「君死に給うことなかれ」』・憲法研究所『抵抗権』中の港野喜代子『与謝野晶子の非戦歌』等参照。

三　明治二十年代の可戦論者・内村鑑三

㈠　内村鑑三が米国留学から帰国したのは、明治日本における初期国粋主義の抬頭しつつあった二十一年である。米国のアーモスト大学等で多くを学んだ内村は、しかしイエス（Jesus）を愛し日本（Japan）を愛する確乎たる愛国者として帰ってきた。しかしその愛国の精神は、三宅雄二郎・杉浦重剛・志賀重昂等々の国粋主義及び福沢諭吉・徳富猪一郎等のナショナリズムに一脈相通じるものを有しつつ、それに対決するものでもあった。しかもまたそれは陸実・正岡子規に共通する多くのものをもっていたと言うことができよう。

内村は、先ずミッション・スクールの北越学館に教鞭をとったのであるが、彼の日本主義的キリスト教の信仰は忽ち米国宣教師と衝突して、彼はその職を抛たねばならなかった。次で第一高等中学校の講師になり、その法律科のクラスでは英文日本憲法の講義を担当し、彼はここに集う英才の教育にあたることに頗る満足した。然るに二十三年十月三十日に教育勅語の渙発があり、翌二十四年一月九日第一高等中学倫理講堂で教育勅語の奉戴式の挙行があり、勅

語に署名された宸筆に対する敬礼（礼拝）が校長によって要請されたさい、彼は良心的なためらいの後軽く頭を下げるにとどまったため、轟然たる不敬不忠漢の誹を受けた。すなわち友人ベルに宛てた手紙の中で、内村は、「まず数人の乱暴な生徒が、ついで教授たちが、私に向って石をふり上げました。国家の元首が非礼を加えられた、学校の神聖がけがされた、内村鑑三のような悪漢国賊をこの学校におく位ならば、むしろ学校全部を破壊するにしかず、というのである」（その友人ベルへの手紙参照）、と書いている。また山本泰次郎氏は、この事件について、「仏教徒がさわぎ出した。保守反動の徒がこれをとりあげた。生徒が附和雷同した。教授らが巧みにこれを利用し、使嗾した。不敬事件は、虚実を織り交ぜて、全国的の大問題となった。歴史に残る、いわゆる第一高等学校不敬事件である」（山本『内村鑑三の生涯』参照）、と描写している。

この事件の中で、内村夫人は心痛の結果同年四月二十三日に死去し、内村自身は「友情」と「世の冷い風」の中で心身共に弱り果てて猛烈な不眠症に陥った。しかし、八月越後の高田に転地してすこしく恢復したので東京に帰宅し、貧窮のうちに『日本の天職』[註一]というすばらしい文章（先ず英文（「Japan, Its Mission」）で「横浜メール新聞」に寄稿し、のちこれを和訳して「六合雑誌」に掲載した）を書いている。翌年九月大阪の泰西館（経営者・宮川常輝）に赴任し、ここで再婚して生活を一新して、本格的に文筆の仕事を始めることとなり、処女作『基督信徒の慰め』（二十六年）を出版した。これはベストセラーとなり、次で『コロンブスと彼の功績』（二十六年）を出版した。また第三著『求安録』（二十六年）執筆中に、井上哲次郎の挑戦に対してキリスト教を弁明して痛烈に井上をやっつけている（『文学博士井上哲次郎君に呈する公開状』（二十六年）参照）[註二]。そして大阪から京都に移転し、更に蔵原惟郭の招きに応じて熊本英学校に赴任した。この期間に第四著英文の『余は如何にして基督教徒となりし乎』（『How I became a Christian』）を出版（執

筆は二十六年)、また『地人論』(二十七年)を書き、『Japan and Japanese』(のちに『The representative men of Japan』と改題(『代表的日本人』)(二十七年)を著わしている。

(1)『Justification of the Corean War』及びその訳文『日清戦争の義』を著わして、国の内外に日本の弁明をしたのも、この二十七年のことである。すなわち当時の内村は、例えばクリスト者の平野友輔と同様に非戦論者ではなく、「義戦」と「不義の戦争」とを区別して、日清戦争は義戦だという主張をしたのである。『世界歴史に徴して日支の関係を論ず』『日清戦争の目的如何』等の文章も、同目的かつ同趣旨のものにほかならない。当時の内村がキリスト教徒であって、しかもなお平和論者でなかったのは、端的に見れば、彼がフレンド派のキリスト信徒でもなく、また北村透谷の如くにフレンド派の信仰に近づいていなかったことにも一つの理由があると言えよう。もちろん彼自身がのちに言っているように、その大きな理由は、彼が武士階級の出身で、戦争を罪悪視せずこれを正しいとする武士的な考え方によっていたことと、彼の尊敬せしクロムウェルがキリスト教徒として戦争を是認していただけでなく、革命戦争及び対外的な義戦を敢てしたことに共鳴していたためであったと見なければならない。

すなわち、そのことについて内村は次ぎの如くに言っている。曰く、「私も武士の家に生れたものでありまして、戦争は私にとりましては祖先伝来の職業であります、それでありますから、私が幼少の時より聞いたり読んだりしたことは、大ていは戦争に関することでありました、源平盛衰記、平家物語、大閤記、さては川中島軍記といふやうに、戦争にかかはる書を多く読んだ結果として、私もついこのごろまで、戦争の悪いといふことがどうしてもわからず、キリスト教を信じて以来ここに二十四年にわたりしも、私も可戦論者の一人でありました。現に日清戦争の時においては、今とはちがひ、欧文をもつて日本の正義を世界に向つて訴へんとするが如き者はごくごく少数でありましたゆ

えに、よせばよろしいのに、私は私の廻らぬ鉄筆をふるひまして、「日清戦争の義」を草して、これを世に公けにした次第であります。カーライルの『クロムウェル伝』を聖書に次ぐの書と見なした私は、正義はこの世においては剣をもつて決行すべきものであるとのみ思ひました」（『余が非戦論者となりし由来』（三十七年））。

かくして内村は、日清戦争の義を論ずるにさいして先ず、正義の戦争は今やその跡を絶った観がある、しかし義戦は古代のユダヤ及びギリシヤに、また中世のローマにそして近世のドイツにもあったと前提して、「戦争の多分は欲より来りしものとするも、渾ての戦争は慾戦の争にあらず、利慾を以て戦争唯一の理由と見做して、神聖なる人類性の価値を下落せしむる勿れ」となし、「吾人は信ず、日清戦争は吾人に取りては実に義戦なりと。其義たるの法律的にのみ義なるにあらずして、倫理的に亦然り、此の如き戦争は、吾人の知らざる戦争にあらず。是れ吾人固有の教義に則るものにして、吾人の屢々戦ひし所なり。基督教国民の義戦を忘却する今日に当りて、非基督教国たる日本の之に従事するを怪むものあらん。然れども非基督教国若し無智ならば彼等は未だ誠実なり、基督教国が其迷信と同時に忘却せし熱心は、吾人の未だ棄てざる所なり。吾人に一種の義侠あり、死を知らざりし希臘の毫強を挫きし羅馬の勇は、今尚ほ吾人の有する所、西洋已にその熱心時代を過ぎしとするも、東洋は尚ほ未だその中に在り、義戦は未だ吾人の忘却せざる所なり」と論断した。

そうして内村は、日清戦争の止むべからざるゆえんは、「過ぎる二十余年間、支那の吾人に対するや其妄状無礼殆ど吾人の忍ぶ可からざる」がためである、すなわちその朝鮮に対する逆抗的な干渉と朝鮮人虐殺の故に「支那は社交律の破壊者なり、人情の害敵なり、野蛮主義の保護者なり。支那は正罰を免かるゝ能はず」、すなわち自由人権の尊重上支那を討たざるべからずと説き、「孔子を世界に供せし支那は、今や聖人の道を知らず、文明国が此不実不信の国

民に対するの道は、唯一途あるのみ。鉄血の道なり、鉄血を以て正義を求むるの途なり」と言い、「新にして小なる日本」が、「旧にして大なる支那と衝突」するのは何故であるか、すなわち「吾人の目的は支那を警醒するにあり、其天職を知らしむるにあり、彼をして吾人と協力して東洋の改革に従事せしめるにあり、吾人は永久の平和を目的として戦ふものなり。……日本国成りてより国民未だ曾て今日の如き高尚なる目的を以て燃えず、今や吾人は一団となり吾人の讐敵に当らんと欲す」とまで極言している。すなわち内村は、「日支両国の関係は新文明を代表する小国が、旧文明を代表する大国に対する関係」（『世界歴史に徴して日支の関係を論ず』）であると見て、「日本の勝利」は確実であり、しかもその勝利の目的は一、朝鮮の独立……二、支那の懲戒……三、東洋の文明化と永き平和……にある（『日清戦争の目的如何』参照）、と断定しているのである。

そのような義戦論が極めて可戦的であり、また主戦的であって、キリスト教主義的でないことは言うまでもない（彼が二十五年に書いた『日本国の天職』の中で、「日本国は欧洲諸大国より最も遠き距離に立つものなれば世界万国中外敵の侵害より安全なることに於ては我国に勝るものはあらざるべし、最少の軍備を以て安全の国防を施すを得るは是日本国天与の地理学上の益と言わざるを得ず」と言っているのも、その可戦論の一論拠と言わねばならない）。このような可戦論を前述の北村透谷の平和論及び後年の内村の非戦論と対比して見れば、当時の内村の思想が徹底したキリスト教主義的思想でなかったことが一目瞭然と言えよう。しかし彼の立場が、福沢・徳富の如き戦争主義でないことは、その同じ文章の中で、「我国民の武を尊び曾て外人の奴隷たることなきを以て我等は武を以て世界に跋扈すべきものなる説を維持する人ありと雖ども余輩の見る処は大いに之と異なれり……今日日本人の体格を露国「コサック」兵又は英国「スコッチ・ハイランドル」兵と相比較する時は我の彼に劣るや論を待たざるなり、大和民族は其武功に於て恥る所なしと雖ども武を以て文

明世界に立んとするは余輩の同意すること能はざる所なり」と説いているところによって明白である。また『地人論』（二十七年）においても、東西両洋の媒介者としての日本の地理学的位置」について、「和平（やわらぎ）を求むるものは福（さいわい）なり、其人は神の子と称へらるべければなり」と言う論調をしめしている。このことは、戦争を讃美した牧師・海老名弾正（註三）の場合と対比して見ればいっそう明瞭に知られるであろう。

しかしキリスト者・内村のキリスト者らしからざる可戦論が、未解決の矛盾を含みつつ、『日清戦争の義』において最高頂に達していることは、これを否定することができないであろう。そうして、最高頂に達した内村の可戦論は、一つの契機を得てまさにその反対物に変らねばならなかったのである。

（註一）二つのJ（ジャパンとジーサス）に献げられた内村の生涯は、ある意味においては、イエスの宗教の書であるバイブルの研究と、これをとおして日本の天職の何たるかを明らかにしようとするものであった。すなわちこの『日本国の天職』はその文筆的活動初期の文章で、東西両文明の調和的使命に日本国の天職があるとするものである。すなわちそれは、「汝旭日帝国よ汝の光線を東西に放ち東の方欧米に反射し西の方亜細亜を照し以て汝の天職を満たせ」と結んでいる。『地人論』は、このような思想を更に進めて地理学的に弁証したものであるが、いづれも可戦論時代の所産にすぎない。しかるに非戦論者となって以降の研究の結果、日本の使命は世界を平和ならしめる宗教的運動の先頭に立つことであるとするにいたった。大正十三年の『日本の天職』の中にそのような思想が展開されているのである（田畑忍『内村鑑三に於ける平和主義思想の展開』参照）。

（註二）内村は、この駁撃の文章において、不敬事件の真相を明らかにし、また激越なる文字を駆使してキリスト教を弁明した。それは駁撃的弁明であって、キリスト教を誣ふる者たちに肉迫して、その不品行と唯物論に彼一流の手榴弾を投じてこれを粉砕した観がある。

（註三）海老名は、キリスト教は絶対的非戦主義ではなく、戦争は人生における最もすばらしきものの一つであると説教したので有名である。

四　内村鑑三の可戦論放棄（二十八・九年）

㈠　日清戦争の勃発にさいして、可戦論を激化した内村は、その戦争の途中から、日清戦争の義戦でないことを思い知らされ、これをまともに受けとめて自省した。すなわち彼は、日清戦争によって、戦争の惨酷さと戦争に義戦なきことを学んで可戦論を放棄したのである。戦捷によって国民が、遼東半島・台湾島・澎湖列島を清国に割譲せしめ、また賠償金二億両を支払わせる条約を得て軍国主義的歓呼の絶頂に達し、富国強兵主義の福沢諭吉が随喜の涙を流していた時、内村は失望のどん底にある思いを味わっていた。例えば、明治二十八年五月二十二日付けでベルに書き送った手紙の中で、彼はそうしたやりきれない気持の告白をしている。曰く「シナとの紛争は終りました。いな終らねばならぬ、と言われています。戦争はわが国民性の中にひそむ善さと、大胆さとをスッカリ明らかにしてくれ、かつ恵み深き摂理は、我々の国民性中のこの大胆さを喰いとめてくれました。「義戦」は掠奪戦に近きものと化し、「その「正義」を唱えた予言者は今や恥辱のうちにあります。」

かくして内村は、可戦論と義戦論を唱えたことの非を反省した文章『農夫亜磨士（アモス）の言』を二十八年に書いたのであり、また『時勢の観察』と『世界の日本』と『寡婦（やもめ）の除夜』（「明治二十九年の歳末、軍人が戦勝に誇るを憤りて詠める」詩）とを二十九年に書いているのである。そうして三十年代になって『罪の結果』（三十二年）を書き、爾来その死にいたるまで平和主義と非戦論とを主張するにいたったのである。すなわち転心した内村の平和論を強めたものは、先ず第一に日露戦争前のナショナリズムと軍国主義の雰囲気であり、第二には日露戦争であり、第三には第一次世界大戦争であって戦争の度毎に彼の平和思想は深化していったのである。極言すれば、その意味に於て内村の平和主義思想

は戦争の産物であった、と言わねばならない。

㈡　『農夫亜磨士（アモス）の言』の中で、彼の強調するところは正義である。すなわち、正道を水の如く、「正義を尽きざる河の如く流れしめよ」と叫ぶアモスの言を引用しつつ、「義戦論」のかわりに、彼は「軍艦を増すも益尠なし、海防を厳にするも力弱し、先づ善（英語の good）を求めよ、信義を厚ふせよ、貧民を撫育せよ、誠実にして真面目なる教育を施せよ、税率を公平にせよ、而して凡ての手段を以て国民の涙と渋苦とを拭へよ、「悪を求めざれ」……」云々と言っている。しかし彼は、未だ進んで非戦論を唱えているのではない。「イザヤの予言」は、なおその脳中に登場していないのである。

ところが、二十九年八月十五日の「国民の友」に寄せた『時勢の観察』になると、自らの唱えた義戦論を猛省している。曰く「彼等は日清戦争を義戦なりと唱へり、而して余輩の如き馬鹿者ありて彼等の宣言を真面目に受け、余輩の廻らぬ欧文を綴り「日清戦争の義」を世界に訴ふるあれば、日本政治家と新聞記者とは心密かに笑て曰ふ「善哉彼れ正直者よ」と義戦とは名義なりとは彼等の智者が公言するを憚らざる所なり、故に戦勝て支那に屈辱を加ふるや、東洋の危殆如何程にまで迫れりやと省みる事なく、全国民挙て戦勝会に忙はしく、……支那兵を倒すに野猪狩を為すが如きの念を以てせり、而して戦局を結んで戦捷国の位置に立つや、其主眼とせし隣邦の独立は措て問はざるが如く、新領土の開鑿、新市場の拡張は全国民の注意を奪ひ、偏に戦捷の利益を十二分に収めんとして汲々たり、義戦若し誠に実に義戦たらば何故に国家の存在を犠牲に供しても戦はざる、日本国民若し仁義の民たらば何故に同胞支那人の名誉を重んぜざる、何故に隣邦朝鮮国の誘導に勉めざる、余輩の愁歎は我が国民の真面目ならざるにあり、彼等が義を信ぜずして義を唱ふるにあり、彼等の隣邦に対する親切は口の先きにて止て心よりせざるにあり、彼等の義侠心なる

ものの浅薄なるにあり」と言い、かくの如き「政治屋」と俗吏と新聞記者とをきびしく非難し、大日本主義に対して小日本主義の主張をしている。(註一) また『世界の日本』(二十九年九月)では、「日本は孤立して地球面上に存在せず」と言い、「真理は愛国心より大なり」と言い、「世界の日本は世界を益する事を以て、其目的となさざるべからず、平和と進歩と開明とを供することを以て其方針となさゞるべからず、口に君子国を唱へて心にミル、ベンタムの粗暴なる優勝劣敗主義を保持するが如き偽善を脱却せざるべからず、義戦を宣言して掠奪を実行するが如き形迹を根絶せざるべからず、世界の日本たるは、大なる事にして、大なる日本たる事は、先ず倫理的に思想的に大なる事なり、兵を増すは是が為めならざるべからず、武に誇らんが為めに非ずして義を強いんが為めなり、富を増すは是が為めならざるべからず、快楽を増進せんが為めに非ずして、真理の発揚を補はんが為めなり」と説いている。これによって明らかな如く、彼はすでに可戦論と義戦論とを棄てているのではあるが、しかもなお非武装無軍備の思想を抱持していない。しかしながら戦争を憎悪する感情が、その胸中に欝勃として渦巻いていることが察知せられよう。

其の詩『寡婦(ヤモメ)の除夜』(明治二十九年歳末)には、その反戦の感情が真に迫って描かれている。しかし、非戦・非武装の平和思想は未だそこにも現れていないのである。その厭戦の詩は次ぎの如くである。

曰く「月清し、星白し、霜深し、よる寒し、家貧し、友少し、歳つきて人帰らず。

思ひは走る西の海、涙は凍る威海湾、南の島に船出せし、恋しき人のあとゆかし。

人には春の晴れ衣、軍功の祝ひ酒、われには仮りのわび住まひ、ひとり手向くる閼伽の水。

われむなしうして人は充ち、われおとろへて国栄ゆ、貞を冥土の夫につくし、節を戦後の国に全うす。

月清し、星白し、霜深し、夜寒し、家貧し、友少し、歳つきて人帰らず。」

㈢　内村の平和思想が、かくの如くに、先ず厭戦・反戦の感情として醸成され、それがやがて非武装平和主義思想に発展するまでには、しかし数年の歳月を必要とした。すなわち明治三十二年の『罪の結果』は、日清戦争弁護の義戦論に対する反省が濃厚に表現されているのであるが、なお厭戦・反戦感情の域を出でないものである。明治三十三年の『興国史談』も明治三十四年の『余の学びし二大政治書』も未だ無軍備論に立つものではなく、非戦論についてもまた不徹底の感がある。明治三十五年に、日英同盟の非を鳴らし強に与して弱を押えんとして「日本国は其無慈悲の故を以て罰せられずには止まない。已に朝鮮に於て、台湾に於て、遼東に於て、大罪悪を犯したる日本国は今や英国に同盟して罪悪の上に罪悪を加へた」と断言した『日英同盟に関する所感』においても、未だその無軍備論はあらわれていないのである。しかし日清戦争の勝利前に較べて、内村の戦争と平和にかんする主張が、一段とキリスト教主義的になっていることは言を俟たないところである。

かくして明治三十六年『戦争廃止論』『満洲問題解決の精神』『近時における非戦論』『平和の実益』『近時雑感』『朝報社退社に際し涙香兄に贈りし覚え書』等々以降における其の「絶対的非戦主義」の思想の展開は、日露の風雲急を告げるにいたって顕然たるものに形成され得たのである。『国難に際して読者諸君に告ぐ』『内外見地の差異』『戦争に関する思考』『歴史的に考察したる日本の外交政策』『戦時に於ける非戦主義者の態度』『無抵抗主義の教訓』『近時に於ける非戦論』『余が非戦論者となりし由来』(註二)『主戦論者によって引用せらるるキリストの言葉』『非戦主義者の戦死』等は、何れも明治三十七年に発表されたものであり、『日露戦争と基督教の趨勢』『平和主義の意義』『平和成る』『日露戦争より余が受けし利益』等は明治三十八年に発表されたものである。また『無抵抗主義の根拠』『国は基督教なくして立つを得る乎』『非戦論の原理』（明治四十一年）、『キリスト教と法律問題』（明治四十

三年）及び『世界の平和は如何にして来る乎』『世は果して進歩しつつある乎』（明治四十四年）等は、日露戦争を契機として到達したその無軍備的絶対平和主義[註三]の思想を、相次いで展開したものである。そして、それらのものは大正三年第一次世界戦争勃発によって加えられた其の戦争刑罰観[註四]へのブリッジになっているのである。

（註一）内村の小日本主義の思想は、のちに小国のデンマルクを理想の国家とする見解と結合するようになって、それは『デンマルクの国の話、一名信仰と樹木とを以て国を救ひし話』（明治四十四年）・『西洋の模範国デンマルクについて』（大正十三年）等の著書となってあらわれた。

（註二）この『非戦論者となりし由来』には、内村の平和主義の転心の理由が叙述されている。曰く

「一、私を非戦論者にしたものの中で最も有力なるものは、申すまでもなく聖書であります、ことに新約聖書であります、私はだんだんとその研究をつづけて、つひに闘争なるものの、そのすべての種類において避くべきもの、嫌ふべきものであることをさとるに至りました、新約聖書のこの句かの語を箇々にとらへないで、その全体の精神をくみとりまして、戦争はたとへ国際間のものでありとするも、これを正しいものとしては見ることができなくなりました、十字架の福音が或る場合においては戦争をよしとするとは、私にはどうしても思はれなくなりました。……二、私をしてほとんど極端なる非戦論者とならしめし第二の原因は、私の生涯の実験であります、私は三四年前にある人たちの激烈なる攻撃にあひました、その時或る友人の勧告に従ひまして、私は我慢して無抵抗主義をとりました結果、私は大いに心に平和を得、私の事業はその人たちの攻撃に由りさしたる損害をかうむることなく、それと同時に多くの新しい友人の起り来りて私を助けてくれるのを実験しました、私はその時に、争闘のいかに愚にしていかに醜きものであるかをしみじみと実験しました、私は確かに信じて疑ひません、私がもしその時に怨みを以て怨みに報い、暴を以て暴に応じましたならば、多少の愉快を感じましたらうが、私の事業は全くすたれ、今の私は最もあはれな者であったらうと思ひます。ロマ書十二章にあるパウロの教訓を充分にさとりましたのは実にその時でありました。……三、私をして非戦論者とならしめし第三の動力は、過去十年間の世界歴史であります、日清戦争の結果は、私につくづくと戦争の害あって利のないことを教へました、その目的たる朝鮮の独立はかへって危くせられ、戦勝国たる日本の道徳は非常に腐敗し、敵国を征服し得しも、故古河市兵衛氏の如き国内の荒乱者はすこしもこれを制御することができずなりました、これは私が私の生国なる日本において見た戦争（しかも戦勝）の結果であります、もしそれ米国における米西戦争の結果を想ひますれば、これよりもさらにはなはだしいものがあります、米西戦争によって米国の国是は全く一変しました、自由国の米国は今や明白なる圧制国とならんとしつつあります、現役兵わづかに二万を以て足れりとし来りし米国は、今や世界第一の武装国とならんと企てつつあります、さうして米国人のこの思想の変化につれて来った彼らの社会の腐敗堕落といふも

のは実に言語に堪へないほどであります、

四、私を非戦論者になした第四の機関は、米国マサツチューセット州スプリングフィールド市において発行せらるる The Springfield Republican という新聞であります。私は白状します、私は過去二十年間のこの新聞の愛読者であります、かくも永く私が読みつづけた新聞は勿論日本にもありません、私の世界知識の大部分はこの新聞の紙面から来たものであります、この新聞は私の見た最も清い最も公平なる新聞であります、これを読んで頭脳が転倒するやうなうれひはすこしもありません、常に平静で常に道理的で、実に世界稀有の思想の清涼剤であると思ひます、さうしてこの新聞は平和主義者であります、この新聞を二十年間読みつづけまして、私もつひにその平和主義に化せられました、その紙上において世界有名の平和主義者の名論卓説を読みまして、私の好戦的論城はついに全くこはされました。

五、このほかにもまだ私を非戦論者になした勢力はありませう、しかしこの四つのものがそのおもなるものであります、ことに近頃私をして非戦論に関する私の確信を固めしめましたものは、哲学者故スペンサー氏の戦争に関する意見であります、

（註三）この時期の内村の平和主義の特色は、「道徳論的且つ政策論的又は利益論的であると同時に、必然論的でもあったと言う点に見出すことができる。就中その必然論的要素を看過することができない」（田畑忍『内村鑑三に於ける平和主義思想の展開』、とくにその一八四頁以下参照）。

（註四）「……第一次世界大戦は彼を衝激した。殊に平和国であると彼の考えていたアメリカの参戦が失望を喫せしめた。かくて彼は、これまで戦争を天然の実在たる悪事であり人類の戦争的性癖に基くものであるとなしてきたが、今度は戦争を刑罰であると考えるにいたった。即ち、この第一次世界大戦を契機として、戦争刑罰観が彼の平和主義に強度に加ってきたわけである。かくて戦争刑罰観とキリスト再臨による千百年後の平和の実現と言う思想が、この後期の内村の平和主義思想の主要素になる。それはイザヤの平和の預言に深く連っている」（前掲拙著一九〇頁以下参照）。

五　むすび

以上で私は、明治二十年代の平和思想として、そのイデオローグたるキリスト者・北村透谷の未完成の平和運動及び思想と、二十年代の末葉になって漸やく可戦論から厭戦・平和思想に転進することのできた同じくキリスト者たる

内村鑑三の思想的進歩について、若干の粗描をした。

ところでそこにおける一つの問題は、フレンド派の透谷が、ためらうことなく平和主義思想をもってその宣伝に従ったのに対し、内村は二十年代にすでに米国においてフレンド派の平和思想に接してをり、かつ聖書とともに平和主義紙たる「The Springfield Republican」を愛読してをりながら、何故最初可戦論者であったのかと言う問題である。もちろん単純に考えれば、前示の如く内村の場合は、武士階級的意識とキリスト教国における義戦の史実及び可戦論についての知識が彼を可戦論者たらしめていたのであり、商人の家に生れた透谷には、木下尚江の場合にもそうであるが、始めから武士階級的意識がなく、それ故にすなおにキリスト教的平和主義思想に自らを投じ得たのである、と一応言うことができよう。しかしただそれだけのことだとは私には考えられない。

すなわちその家庭的環境、及びその他の環境による意識もさることながら、そのような環境による意識の決定者は、彼等の各々に固有する性格であったと言わねばならないからである。そのように考えないかぎり、同じ環境に在る者の思想の相異の問題についてこれを弁別することができないのである。すなわち内村の絶対無垢の矛盾的性格(天達文子教授によれば「ライオンと赤ん坊の混合」の如き性格)[註一]が、その家庭的及びキリスト教的環境によって彼を先ず可戦論者にし、次で経験をもとに時代的環境に反した平和主義論者にしたのであり、また詩人であった透谷の清純な情熱と理想主義的な資性、透徹した論理的な頭脳[註二]が家庭的及びキリスト教的環境の媒介によって彼を時勢的環境に反して徹底的な平和主義者たらしめたのであると言えよう。かくして、直ちに信じることのできた単純とも言える性質の北村透谷は明治日本におけるキリスト教的平和主義思想の先駆者となり、これに反して科学的で疑い深い内村鑑三はクェーカー的信仰の影響を速急に受け容れることがなく、透谷の自殺した二十七年にはなお戦争論(可戦論)の立場に立

っていたのであって、その『日清戦争の義』は透谷自殺後の幾何もない時の論策であった。そして、その翌年から日清戦争の不義戦なることを知って時勢に反逆した平和主義思想への出発を、恰かも透谷の後継者たるかの如くに始めることになったのである。しかし日本のキリスト教主義的平和思想の最も典型的なものはキリスト教入信の場合においても同様であった遅きスターターの内村鑑三によって完成されたのである。

明治二十年代は実にかくの如き平和主義思想草創の時代であったのである。

（註一）　鈴木俊郎編『回想の内村鑑三』中の天達文子『十字架にすがる幼児』参照。

（註二）　『透谷全集』全三巻参照。